

OUMC

大阪大学山岳会 会報

No.13

2011年6月

発行 大阪大学山岳会

〒562-0031 箕面市小野原東4-19-45

大野義照方

山岳会ホームページ開設

情報交換や記録閲覧OK

事務局 山田 靖則

本山岳会の会員への情報伝達はこれまで、はがき・封書・電話が主体であった。しかし、近年はインターネット技術を利用したホームページ（HP）が企業だけでなく、個人の情報発信手段としてもポピュラーなものになり、受信用メールとセットになった双方向の情報伝達が当たり前になってきている。

現役山岳部は以前からHPを開設



し、活動紹介や情報交換の場を提供していた。山岳会でもこのような方向は意識され、特に、山岳部員の減少に対する危機意識から、山岳会の積極的な情報発信が部員獲得の一助になればと、HPを早急に立ち上げるのが昨年の理事会で決まった。HPの意義はこれだけでなく、前述した電話や封書などによる会員への連絡をHPを介して日常的に行えるようにし、会合や山行計画を多くの会員に提供することで会の活動を活性化すること、さらには会員への封書などによる連絡を少なくすることで事務経費節減も狙っている。

作成にあたっては当初、専門業者への外注を考えたが、日常的に情報更新が不可欠であることから会内部で作成することにした。日本山岳会をはじめ各大学山岳会のHPを参考に

事務局で形を作り、サーバー（情報格納用コンピューター）を契約することで、昨年8月中旬に暫定版を公開。その月末の白馬集会で出席者にお披露目した。その後、写真などを

入れ替えながら今に至っている。HPの表紙を写真に示す。

HPには新着情報を紹介するNEWS欄とMENU欄があり、MENU欄では山岳会の紹介に始まり、事務局からの連絡、活動予定、会報「OUMC」のバックナンバー、山行記録が並ぶ。続く山岳会アーカイブス（保存資料）では、旧会報「時報」の全巻やP29報告書2冊、その他海外登山記録のPDF文書が収められ、「電子書籍」として閲覧できる。このほか山岳部HP（現在、休止中）、情報交換用の掲示板、他団体とのリンクの項目がある。

HP開設がまだ会員に十分認知されていないこともあって、今のところ事務局からの情報発信が主で、双方向の情報伝達は実現していない。今後は会員諸氏の山行計画や記録を発表していただき、会活動の活性化につなげたいと考えている。また、契約サーバーには10個のメールアドレスが登録できるので、山岳会内部で日常的にメール交換しているグループは連絡してほしい。

× ×

山岳会ホームページのアドレスは

<http://oumc.sakura.ne.jp>

山岳会のメールアドレスは

info@oumc.sakura.ne.jp

です。

OB諸氏の支援に感謝

危機脱した山岳部のその後

山岳部長 森藤 正人

部員減少で一時は消滅かと思われた大阪大学山岳部ですが、多くの方々のご尽力により、ひとまず危機は脱したようです。引き続きOBの皆様のご支援をお願いしたく、この1年ほどの経緯をお知らせします。

2009年秋 現役部員から山岳部解散についての相談を受ける。

「今の部員3人が次年度は最終学年となるため、新入部員が入ったとしても知識や技術を伝えることができない。そのため体育会から脱退し、今後はサークル的に個人的な登山活動を行うつもり」という。ただ、その場合、大阪大学には休部という制度がないので、解散という形になり、大学の公認団体としての山岳部はなくなるということ。

2010年3月 大野義照山岳会長と会い、山岳部の現状や部員の考えを説明する。大野会長は「解散は避けたい」との思いで動いてくださるとのこと。

4月 大野会長から、中之島山岳部（いまの名称は中之島アウトドア

部）の部員に形だけ入ってもらって部を存続させる、との案を受ける。

6月 大阪近郊に住むOB数名で会合、今後の方針を話し合う。メンバーは科野、奥山、榊原、大倉、枋尾、三十尾（以下、敬称略）の各氏と森藤。インドアクライミングを中心に活動する▽阪大生対象にクライミング講習会を行い、入部者を募る▽学生の山岳部活動のための費用は山岳会で補助する——などを決め、入部勧誘活動を始める。

6月末 第1回のクライミング講習会を大阪・西淀川区のクライミングジムで行う。榊原、大倉、河野といった、ちゃんと登れるメンバーが学生の面倒をみて、僕や年配のOBはボルダリング。最初はこうなることかと案じたが、中之島アウトドア部の部員を含む参加者5人のうち3人が入部。とりあえず一安心した。

2011年4月 ここまでに数回のクライミング講習会を行い、今のところ部員は5人。新入生への勧誘もおこなって何人入ってくれるかに

期待している。

× ×

ごくかいつまんで、この1年間の活動を僕の記憶を頼りにまとめましたが、その間、多くのOBがメールで意見をくれたり、実際に支援してくれたりしました。ここで改めてお礼を申し上げます。

ただ、とりあえず部消滅の危機は脱したとはいえ、問題は数多くあります。

・ 今後、どんな活動をするのか。今のところクライミング中心ですが、雪山やヒマラヤをめざすのか？

・ 5人入って一息ついたけど、相変わらずの少数精鋭で、いつまたゼロになってもおかしくない。現に4月下旬時点で新たな入部希望者はない。

・ 事故があったとき、だれが救助に行けるのか？ などです。

実は、今の部員は全員、他の部と兼部しています。今の若い人は山一筋ばかりじゃなく、いろんなことを楽しもうとしているようにも見えます。正直言うと、僕自身は、時代の趨勢でだれも入部しないのなら山岳部がなくなるのも仕方ないかと思っていたのですが、楽そうにクライミングをしている部員たちを見ると、山岳部が続いてよかったと思うし、願わくば、この輪がもう少

し広がれば、と思っています。

（阪大大学院工学研究科助教、1985年基礎工学部卒）

山岳部支援へ常設委

本会は、現役山岳部の新入部員勧誘活動などを支援する目的で新年度から「山岳部支援委員会」（仮称）を設立する。

山岳部への支援策としては昨年、中之島アウトドア部の協力で部存続が決まったあと、中堅・若手OBでアドバイザリーチーム（AT）を発足させ、インドアクライミング講習会開催などに取り組んできた。支援委はこのチームと活動を継承する一方、今後の山岳部活動がアウトドアに移行することを見越して共同装備の整備や事故防止対策の確立をはかる。また、山岳部ホームページの再開も支援する。

委員長はATのリーダーを務めた明神知理事（78基礎工）に委嘱、委員の人選は一任する。

外大山岳会から交流要請

昨年6月、大阪外国語大学山岳会（OGAC）から、阪大山岳会と交流したいとの申し入れがあり、今後、出来るところから交流を進めていく

ことで一致した。

本会の大宅幸夫会員（齒76年）が、かつて関西学生山岳連盟（AAVK）に所属した各大学OBでつくる「AAVKOBの会」に出席した折、参加していたOGACの上島康嗣氏から「大阪外大は（2007年の）大学統合で大阪大学外国語学部になったこともあり、交流を行ってはどうか」との意向が示された。

これを受けて8月にOGACの船

井総一事務局長、山田昭一氏、上島氏と本会の大宅氏、事務局の山田靖則が大阪市内で懇談、交流の在り方について意見交換した。

両会とも組織統合までは考えておらず、今後、事務局間で懇親会や合同山行などの交流企画を検討する。

旧外大山岳部は30年前に消滅し、OGACはOBだけの組織になっている。（山田 記）

ゲニ峰の雄姿に感銘 中国・四川省西部の山旅

田井 英男

昨年12月から今年1月にかけて、私と石原敏雄君（理70卒）は、チベットとの境界に近い中国・四川省の「横断山脈」のゲニ峰周辺にランドクルーザーで10日間の山旅をおこなった。12月23日、中国国際航空機で四川省の省都、成都へ入り、中国人ガイドとドライバーと落ち合った。

◎12月24日（快晴） 成都出発。

雅安までは成雅高速公路、次に川蔵公路（南路、318号線）を西へ目指した。石原君はチベットや四川省西部の山々に数回の偵察を試みてきたが、田井は1970年のP29遠征

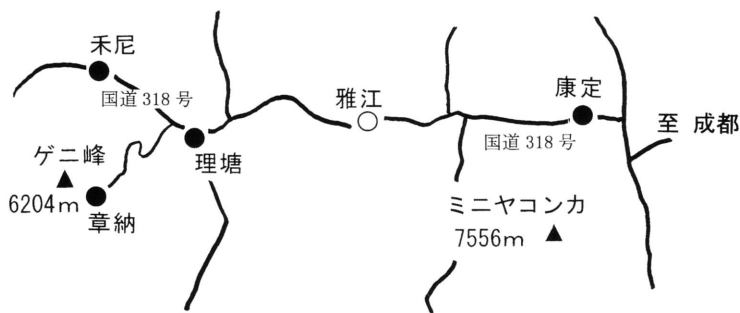
4次隊以来の海外の山旅で、興奮気味である。高速道路から318号線に入ると田舎道になるが、多数の大型トラックやタンクローリーがチベットを目指して砂塵をあげている。夕刻、康定着。一応、都会で、バス付きの立派なホテルに泊まった。

◎25日（快晴） 康定出発。谷に沿って上流へ向かい、途中、雅江の街の食堂で四川料理の昼食を味わう。

雅江は郵便局や下水施設もある街であった。ここを離れると中国風の家がまばらとなり、所々、チベット族の家があり、ヤクの放牧が見られる

ようになる。草原の向こうに雪の山並みが眺められるようになり、やがて理塘（リタン）に着いた。ここが最後のホテル泊まりであるが、水道は凍っており、シャワーも水洗トイレも機能しておらず、寒い夜だった。

ドのような、いくつもの岩山の間を通り抜け、しだいに高度を上げてゆく。途中の峠には必ずチヨルテン（仏塔）があり、経文の記されたタルチヨ（幟）が寒風にはためいていた。やがて高度約4、700呎の尾根上から西南の方角に、雪を抱いた山並みが眺められるようになる。最南端のピラミッド状の立派な雪の峰が目指すゲニ峰（6、204呎）である。その北に5、000〜6、000呎級の峰々がまさに「峨峨たる…」といえる山並みを形成している。



ガイドによれば、シャター山（5、850呎）、カメロン山（5、458呎）などらしい。ゲニ峰はすでに日本ヒマラヤ協会隊によって登頂されているというが、この山系にはまだまだ未踏の峰々や登攀ルートも無数にあると期待される。

ここからは谷に沿ってどんどん下ってゆく。両側の斜面は放牧場となっていて沢山のヤクが枯草を食んでいた。午後1時前、チベット族の集落、章納に着いた。まず、公安警察署に出頭し、パスポートを提示して滞在許可をもらう。住居は石造りの2階家で、電気も供給されていた。どの家の屋上にもパラボラアンテナが設置され、テレビや冷蔵庫もあるようだ。しかし、夜は薪ストーブで暖を取り、シユラフにもぐりこんだ。



ゲニ山脈。左端がゲニ峰

◎ 27日 (快晴) 今日はいよいよゲニ峰の懐に近づいた。チベット族の馬子を雇い、午前10時、馬で出発した。道の水たまりは固く凍っているが、チベット族の若者が2人乗りのバイクで氷の道を行くのは驚ろかされた。谷底の蛇行する流氷も白く凍っている。午後1時過ぎ、谷の奥にピラミッド状の見事な氷の山が現れた。昨日見たゲニ

峰であろう。午後2時30分、ゲニ峰に別れを告げ、5時40分、章納に帰着した。

◎ 28日 (快晴) 章納の集落から馬2頭で、流れに沿って1時間ほど下った後、西側の山に取り付いた。急な狭い山道を馬は平気で登って行く。やがて小山の頂上の平地に着き、馬を下りた。ここからゲニ峰と、これに連なる山々がよく眺められた。昼食後、ゲニ連峰と別れを惜しむつ午後3時50分、章納に戻った。

◎ 29日 (快晴) 午前9時50分、再びランクルに乗り、禾尼(クニ)に向けて出発。谷筋をくねくねと登り、高度約4,400呎の尾根上に達した。今日もゲニ峰以下の山並みが光っていた。さらに下ると、理塘高原の向こうに理塘の町が見渡せた。町はかなり大きく広がり、理塘寺も見える。道はやがて川蔵公路(318号線)に合流し、西へ左折して禾尼を目指す。

午後3時10分、禾尼の集落に達したが、公安警察署のゲートは南京錠でブロックされていて宿泊許可を貰うことができない。今夜はここで泊まり、翌日、理塘高原を探索する予定であったのが挫折することとなった。仕様がないので、すこし西の海子山(4,685呎)まで行き、湖畔の展望台から西の山並みを眺めた

後、禾尼の公安警察に戻って見たが、やはり留守のままで処置なし。しかたなく318号線を理塘に戻ることとした。その途中、再びゲニ連峰が遠望されたが、さらに接近する望みは絶たれてしまい、残念至極であった。

◎ 30日 (快晴) 名残惜しいが、もう帰らなくてはならない。理塘寺を見物した後、帰途について。途中、318号線から少し外れた小山に登ると、南方の四川省の最高峰、ミニヤコンカ(世界11位、7,556呎)の山並みを眺めることが出来た。途中に高い山がなく、見事な眺望であった。この山系にも多くの未踏峰があるとされている。午後7時55分、



田井氏(馬上)と石原氏

康定のホテルに到着。翌日は成都に戻り、観光の後、日本に帰った。

× ×

ゲニ峰に連なる山々の多くは、切り立った岩壁に囲まれ、登攀対象としてロッククライマーにはこたえられない魅力を放っていると思われる。しかし、不安定なチベット情勢を反映してか、中国当局はこの地域への外国人の旅行には神経を尖らせている。その一方でチベット族対策に力を入れている様子が見えられた。新しい村落を建設したり、送電線や通信路(携帯電話の中継基地や光ケーブル)を敷設したりしている。村の家々の屋根にはパラボラアンテナが空をにらみ、テレビや冷蔵庫は当たり前前に普及しているようであった。別の卑近な例としては、チベット族の家にはトイレはないが、あちこちの公安警察署には公衆トイレが設置されているなどの光景が見られる。登山を目指す立場からも、今後ともチベット情勢の変化から目を離すことはできないだろう。

今回の旅は快晴に恵まれ、昼間の気温はマイナス10度前後と低かったものの、雪に降られることもなく、すべてを楽しむことができた。

なお、成田―成都間の航空運賃は10万円弱、成都からのトレッキング費用はすべて込みで1人当たり30万

円強であった。

〔参考資料〕

1. 中村保「四川西部高地のアルパイン・パラダイス」(岳人2011年5月号)

2. 長田幸康「チベット―全チベット文化圏完全ガイド」(2006年8月) (有 旅行人)

(1961年工学部卒)



田井、石原両氏に出雲路氏を加えた3氏は5月連休に再度、四川省を訪れる計画だったが、チベット住民との緊張の高まりを理由に中国政府が外国人の立ち入りを禁止したことで断念を迫られた。

強まる外国人の入域制限

出雲路 敬孝

約3年前から中国の西部、チベット周辺の山に登れないかと、石原敏雄理事が中心になって勉強を開始した。以来、チベット自治区並びに四川省西部の山域に少しずつ触れてきたが、近年、これらの地域やその周辺で、独立や自治権の拡大、民族文化の保護を求めるチベット人ら原住民族と中央政府(漢人)との間の軋轢が深まり、その結果、外国人の入域が大きく制限されている。独立運動などをそのかす可能性のある外

国人と原住民との接触を嫌い、公安部门が入域許可を出さないのだ。このため偵察を目的とするトレッキングや登山が実行できない事態になっている。

2009年11月にチベット自治区のミヤンマー国境に近いカンリガルポ2峰(6,805㍎)に初登頂した神戸大隊は中国地質大学(武漢)との日中合同学術登山という枠組みをつくることによって、この年に登山で来た唯一の隊であった。しかも第1登は中国人隊員のみチームで、日本人隊員は第2登だった。

また2010年度集英社ノンフィクション賞を受賞した角幡唯介氏(巨大探検部OB)の「空白の五マイル」は、1998年から2009年にわたるヤルツアンポー大峽谷(チベット自治区南部のナムチャバルワ峰を巻いてインドに至り、ブラマプトラ川になる)の遡行記録であるが、3回目で成功した2009年は確信的無許可入域であった。2010年10月には東北大隊が懸案のチベット自治区、ブージャカンリ峰(6,328㍎)への偵察を計画したが、許可が出ずに断念した。

このような入域規制は2009、10年まではチベット自治区(並びにさらに西北部の新疆ウイグル自治区の一部)が対象で、四川省の登山

は自由と見られていたが、2011年初めには四川省でもチベット人の多いアバチベット族チヤン族自治州(隣接する青海省南部や甘肅省南部チベット人地域も含め)でも、漢人とチベット人の大きな衝突が発生、次第に民族間の軋轢が深刻化また広域化している感がある。

北八ヶ岳縦走

年齢相応の山楽しむ

野田 憲郎

八ヶ岳連峰は蓼科山から夏沢峠までの北八ヶ岳と、それから南の南八ヶ岳に分かれる。赤岳を中心とした南の男性的な明るさに対し、北は森林に覆われた、なだらかな山の連なりで、優しい雰囲気である。毎年5月に2泊程度の山行を楽しんでいる東京支部有志も今や平均年齢70歳程度。年相応の山として北八ヶ岳縦走を選んだ。

メンバーは野田のほか、山本信樹、横尾秀次郎、出雲路敬孝の計4人。4月29日〜5月1日の2泊3日の日程で、蓼科のピラタスロープウエイで坪庭↓北横岳↓縞枯山荘(泊)↓縞枯山↓麦草峠↓中山↓黒百合ヒュッテ(泊)↓天狗岳往復↓渋の湯の計画だった。

今回、石原氏が計画した5月のミニヤコンカ峰周辺入域が中止となったのも、国もしくは地方政府の規制が入ったためと見られる。当面は事態を見守り、座学研究を進めつつ状況の好転を待つしかない。

(1967年工学部卒)

4月29日(高曇り)一気に標高2,200㍎に上がり、坪庭で弁当。地面は完全に雪に覆われている。12時20分発、坪庭散策コースを左にそれて北横岳(2,472㍎)へ。北岳や浅間山がやっと思える。頂上からは稜線伝いに岩場の続く三ツ岳、さ



北横岳頂上で。左後方は蓼科山

らに雨池峠を経て、縞枯山荘16時5分着。山荘は小さいが、トイレは最新の大小分離式バイオトイレ。

30日 (強風、曇り) 6時5分、出発。縞枯山(2、403[㍎])、茶白山(2、384[㍎])のゆるい斜面を縦走して道路の通っている麦草峠へ。朝のうちは雪が締まっていて歩きやすい。強風も針葉樹の森の中ではあまり感じない。途中でカモシカの死骸が雪の下から少し出ていた。麦草峠からは、まだ一面結氷の白駒池を経て高見石へ。山本は白駒池から下山。10時30分、高見石で昼食の後、ゆるい登りを中山(2、496[㍎])へ。すこし下って東側がすっぱり切れた稜線沿いに中山峠。12時50分、黒百合ヒュッテ。西天狗岳(2、646[㍎])の丸いピーク、東天狗岳の岩のピークがすぐ近くに見える。翌日登る予定だったが、天気が悪くなりそうなので、この日のうちに登ろうと出かける。森林帯を抜けると東に雪庇が出ている。強い西風にあおられながら登るが、雨が降り出したので中断。ヒュッテは宿泊者30人ほど。ゆったりしている。

5月1日 (小雨↓曇り) ガスっているし、風も強いので天狗岳はあきらめ、6時30分、下山開始。8時5分、バス起点の渋の湯着。結局、全行程が雪の上だった。ひと風呂浴び

て茅野へ。
気心の知れた仲間との山行は楽しい。山も全体にアップダウンが少ない楽なコースだった。今度は無雪期にのんびり歩いてみたい。
(1960年経済学部卒)

ルートル+現役新人で 雪の蝶ヶ岳アタック

明神 知

榊原淳君の「涸沢で生ビール!」という呼びかけに誘われて30年ぶりに雪山に出かけた。当初は、初日に涸沢に入ってビール、翌日は北穂高をアタック、河野美樹隊も合流して雪上訓練の後、ビール。3日目は大倉徹雄君や元気組の榊原隊は西穂高へ、ルートル隊は蝶ヶ岳の計画だった。ところが、入山直前に大規模な雪崩が起きて横尾谷が閉鎖され、涸沢ヒュッテも一部損壊。ルートル隊は雪山新人の現役同伴でもあり、蝶ヶ岳へ直行する計画に変更した。メンバーは、明神のほか、科野昌蔵、奥山宏臣、澤村拓(現役3年)の計4人。

4月29日 (快晴) 横尾ルートの閉鎖は解除されたものの、雪多くデブり状態。上高地からの穂高や明神岳が神々しく見える。9時50分、徳沢園右手の長堀尾根に取り付く。最初

の急登300[㍎]でこの尾根のしんどさを思い知る。氷結のためアイゼン、スパッツ装着。標高1、900[㍎]から傾斜は緩くなるものの、雪穴に足を取られながらの登りが蝶ヶ岳まで約5[㍎]続く。15時20分、ルートルの疲労は隠せず、やっと長堀山(2、564[㍎])へ。15時30分、二重稜線の窪みをテントサイトとする。疲労困憊で18時には全員就寝。

30日 (快晴のち雷雨) 5時30分、アタック出発。槍ヶ岳が奇麗に見え、穂高の稜線もくつきり。6時15分、蝶ヶ岳山頂(2、677[㍎])。風強く強風体勢を取る。7時30分、テント場に戻り、近くの雪面で滑落停止訓



蝶ヶ岳頂上で。左から科野、澤村、奥山

練。8時10分、テントを撤収して出発。穂高の稜線には暗雲がたれ込め、風はさらにきつくなった。

榊原隊は涸沢を諦めて、新穂高から西穂高に社会人の雪山新人を連れて行くとのこと。携帯電話のFacebookで写真入りの各隊の状況が入手できる。

10時30分、疲れ果てて徳沢園に下り立つ。バタミナルに向かう途中で河野隊と出会ってから雨が降り出し、ついに雷雨に。河野隊は徳沢でテントに1泊して帰るとか。

久しぶりの雪山に昔の感覚を取り戻した満足感とともに、温泉と飛騨牛を目指して雨の上高地からの逃げ足は速かった。澤村君は「1年前から漠然と雪山に登りたいと思っていたことが実現できて良かったが、雪山に対する知識不足、準備不足を実感した。予定より短い山行であったが、次回以後の目標を明確にするための最初のよい経験ができた」と満足そうであった。

(1978年基礎工学部卒)

P29 遠征の映像を公開

夏の白馬集会

2010年度の白馬集会は8月28日から長野県白馬村八方の「ホテル対岳館」(丸山徹也館主)で開かれ、

会員家族を含め19人が参加した。初日は開会式と夕食のあと、別棟の「與兵衛俱樂部」へ。会創立60周年記念事業などについて懇談したほか

私のJRM

甲田 吉彦

この1月、「開運!なんでも鑑定団」なるテレビ番組に出演し、その際、太極拳を披露しました。始めて8年になります。家内のすすめに、

「先々、濡れ落ち葉にならないように」くらいの動機でしたが、そのスローな動きの中に、今や生きがいを感じるほどはまっています。現在、2段位。今年最高位である3段位に挑戦します。ちなみに家内も2段位、ライバル同士です。

中国4千年の歴史の中から生まれた太極拳をみなさんにおすすしめします。例えば、中国古来



太極拳のすすめ

か、P 29 遠征記録の保存作業を進めている兼清喜雄氏（工60）が第1次隊の16ヵ映像のデジタル版などをパソコンで公開したほか、事務局から

の「易経」に「易に太極あり、これ大地を生ず」とあり、「カオス」の状態から「天地」を創造し、「陰と陽」を統一するとあります。老若男女問わず、いつからでも始められます。

緻密で深遠な太極理論に裏打ちされた太極拳は、発展の過程で武術的な面とは別に、健康に非常に有益なことが実証されてきました。

意識でもって呼吸法を使い、身体を動かす。その動きはゆっくりしているが、「意」「息」「身」の調和によって、例えば気血の循環がよくなり、免疫力が向上する、あるいは太極拳の姿勢によつて足腰の筋力が強化され、柔軟性が向上し、健康増進、身体能力アップに効果があることは医学的にも証明されています。

私も太極拳を始めたことで人のネットワークが広がり、飲む機会が増えたり、大会や昇段試験に挑んだりすることで、ワクワク感を感じながら健康な毎日を送ることができています。ぜひ一度、トライしてみてくださいいかがでしょうか。

（1969年基礎工学部卒）

も制作中の山岳会ホームページの暫定版が披露された。

2日目は自由行動。3日目の懇親ゴルフ大会は安曇野市の穂高カントリークラブで開かれた。

出席者は次のみなさん。（会長以外は卒業年次順）

大野義照▽田島汎▽山本光二▽宍戸元▽坪井和子▽兼清喜雄▽広瀬貞雄▽田井英男▽大工原恭▽保母武彦▽米沢成二▽前澤祐一▽高田邦雄▽山田靖則▽田中喜樹▽稲垣佳夫

少人数ながら盛況

OUMC新年会

本会の2011年新年会は2月10日夕、大阪市北区の阪大中之島センター（旧歯学部跡）で開かれ、15人が出席した。

大野会長の挨拶、乾杯の後、山本光二さん（法54）からP 29 遠征記録保存委員会の設立と活動について報告があった。また、事務局からは信州大学士山岳会の60周年記念事業報告書の紹介があった。このほか甲田吉彦さん（基礎工69）のテレビ番組「お宝、なんでも鑑定団」出演の話など、大いに盛り上がった。

なお、現役山岳部にも藤稿衛チーフリーダー以下全員の出席要請をしていたが、大学行事と重なって欠席

となった。

出席者は次のみなさん。（会長以外は卒業年次順）

大野義照▽堺谷弘▽山本光二▽木村裕一▽高木俊夫▽三枝礼子▽西川元夫▽岡田博司▽五百蔵弘典▽大川和秋▽高田邦雄▽石浜高明▽甲田吉彦▽山田靖則▽明神知

東京支部だより

早過ぎた? 忘年会

東日本大震災による地震や津波で被害に遭われた方々にお見舞いを申し上げます。当会員にも日立市など震源に近い所にお住まいの方々がいらっしゃると思います。被害が大きくなかったことを祈っております。

昨年11月26日（金）、東京溜池・頤和（いわ）園で支部の忘年会を開きました。出席者は10名でした。開催時期（早過ぎ? 急過ぎ?）、曜日（金曜日の夜は現役登山者にはもったいない?）などを反省点に今後の出席しやすい催し方を考えてみます。

参加者は次のみなさん。（卒業年次順）

大島輝夫▽野田憲一郎▽兼清喜雄▽米澤成二▽前澤祐一▽横尾秀次郎▽出雲路敬孝▽石原敏雄▽井上太一▽佐野威和雄（出雲路記）

会員の近況

白馬集會や新年会の出欠はがきなどから抜粋。その後の変動などは未確認。卒業年次順に西暦。敬称略

二木 節夫(工54) 日本山岳会が

「一般法人」か「公益法人」かをめぐって悩んでいたようですが、論外です。過去のサロンの余韻を残したい人たちは東京在住の特殊なグループだけでしよう。山岳会の財産は公営の「日本山岳博物館」(仮称)に寄付すべきです。しかし、阪大山岳会は閉鎖的なサロンであってよいのです。大阪に住んでいない者にとっては若干不便ですが。私はまあまあ年相応に元気です。

坪井 和子(葉58) 腰痛で山登り

どころか、平地も歩きにくくなってきました。ゴルフは「ブロック注射」をするのできるのですが、ボールはなかなか思った方向に飛びません。絵は最近、100号の半抽象を描いて公募展に挑戦しています。

野田 憲一郎(経60) 5月8日、

山の環境保護団体、NPO法人日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト(HATJ)の年次総会で議長を務めました。山のごみ拾いの草分け団体で、理事に就任して10年、

やりたいことはいろいろですが、金がないのが最大の問題。それでも主要な山岳団体と連携して「山の日」を国民の祝日として制定する運動や野生鳥獣の日撃記録を広く登山者から集めて棲息実態を調べる活動、山のトイレを改善する運動などに取り組んでいます。

白井 達郎(工62) 昨夏、脑梗塞

で倒れ、いまだ本調子ではありませんが、だいぶ正常に戻りました。

梶本 孝治(工63) 1月末で古稀

を迎えました。仕事も昨年までは老人の小遣い稼ぎ程度のことをしておりましたが、一切の勤めを止め、「毎日日が日曜」の日々となりました。ただ、体調がいま一歩で、せっかく六甲山麓に居ながら山の方へ足を向ける元気もなく、老人くさい日々を過ごしております。

大川 和秋(工64) 昨夏、「黄色

靱帯骨化症」という難病で胸椎部の手術をしました。まずは日常の歩行に差し支えない程度までの快復をめざしています。どの程度まで復帰できるか分からない病気ですが、目標は高く掲げています。

吉川 信也(理65) 山は写真で楽

しむしかなくなりました。仕事のほうは、もう少し現役並みにやりたいと思っています。

大野 義照(工67) 仕事も山も続

けています。昨年は次の山に登りました。

5月11宮之浦岳▽7月11武尊山、

赤城山(学会の後)▽8月11蓼科山、

高妻山(山岳会例会前後)、米国

Grand Teton国立公園の中心、グランドテイトン峰(4,197呎)の

標高3,000呎までハイキング▽

9月11塩見岳(学会の後)▽10月11

高千穂峰、開聞岳(同)

原 治左門(理67) 晴耕雨読と

言いたいところですが、その日その日を何とか過ごしているのが実情で、草刈り、野菜・果物栽培、散歩の毎日です。たまには出かけますが…。

黒田 治朗(医69) 医者はまだ現

役ですが、勤務を半分減らし、かなりゆとりができました。膝痛をサプリメントで少し楽にできればハイキング程度をするつもりです。

岡田 謙治(法69) 元気な間に楽

しもうと、昨年からシステム開発業の仕事半分減らし、1~3月はスキー、4~12月はヨットとサイクリングに精を出しています。12年前にスタートさせたホームページ「KOKA@尼崎通信」のURLは次のように変更しました。

<http://www.koka-base.net/>

上松 一雄(工75) 相変わらず発

電機用原動機の業務を続け、元気にやっております。最近山登りより

旅行がレジャーの主体です。

大宅 幸夫(齒76) 相変わらず近

くの沢と雪の山へ、日帰りか前夜泊

で通っています。最近、スノーシュー

(雪上歩行具)を買って、湖北に

ある妙理山という山に登りました。

山スキーのような登高感覚もあり、

思ったよりも面白い履物です。

渡辺 景子(基礎工05) 最近、塩

野七生の「ローマ人の物語」にどっ

ぱりつかっています。カエサルが冬

期にアルプス山脈を越えたり、ロー

マ軍の兵士が40kgの荷物を持って進

んだりする記述。そこだけは歴史よ

り山岳部での思い出がいっぱい

になってしまいます。他の読者より

も現実の大変さがわかる気がする優

越感のせいでしょうか。登山の経験

がこんなところで生きてくるのはお

もしろいです。

編集後記

ホームページ、ご覧になりました

か。創刊以来の「時報」の収録など、ぜひたくな中身です。「OUMC」のほうは、現役山岳部の活動報告が休止中とあって、原稿が少なめです。そこで、山から足の遠のきがちな会員向けに新コラム「私のこのごろ」を設けました。スポーツ、趣味など、どんな分野でも大歓迎です。(会報担当・高田邦雄)